

今日のみ言葉 180 「再びあなた方と会い、あなた方は心から喜ぶ」
(ヨハネ16の22) 2009.6.10

今はあなたがたも、悲しんでいる。しかし、わたしは再びあなたがたと会い、あなたがたは心から喜ぶことになる。その喜びをあなたがたから奪い去る者はいない。

(ヨハネ16の22)

You have sorrow now, but I will see you again and your hearts will rejoice, and no one will take your joy from you.

この言葉は、イエスが捕らえられ十字架につけられる前夜に語った言葉であり、いわば遺言のように残されたものである。

弟子たちにとって、主イエスは、3年間ずっとともにいて自分たちを導き、さまざまの大いなるわざを直接に示して下さったお方であり、イエスの力を受けるときには、だれかに宿る悪の霊すら追いだされて、新しくされるというかつて経験したことのないことも知らされた。そのような絶大な存在であったイエスがこの世からいなくなる。それは残された人たちにとって大きな悲しみである。

しかし、イエスは再び来られる。そのときに与えられる喜びとは、誰も奪うことのできない本質を持っている。再び来るとは、聖なる霊という目には見えないかたちで、いわば風のように来られるということなのである。

私たちが味わう喜びはさまざまである。最初に経験するのは、泣いていた乳児が、母親からミルクを与えらるるときに、喜ぶことでわかるように、不可欠な食べ物による喜びである。そして人間同士の関わりや遊び、学ぶこと、勉強やスポーツ、あるいは仕事において、人から認められ、称賛されること、などに広がっていく。

しかし、そうした喜びはすべて簡単に取り去られ、壊れていく。心ないひととで友達関係の喜びは消え失せ、一瞬の事故や病気によってたいていのそうした喜びはなくなってしまふ。そして悲しみが残る。

この人生そのものが全体として、はじめは若々しく活気があって楽しみや喜びがいろいろあるが、次第に老年になるとそれらは大抵失われて、ばくぜんとした憂うつや悲しみが蓄積されていくことが多い。

こうした現状は、ただ一つの道によって変えられる。それが、イエスが私たちのところに来てくださること、悲しみや暗い心のただなかで、主イエスと出会うことなのである。そしてそのことによって与えられる喜びは、病気や事故、あるいは老年や死が近づいてもなお、奪い去られないような力を持っている。それは永遠の神ご自身からきているからである。

私たちの日曜日ごとの礼拝集会も、この主イエスに出会うことが目的であり、その出会いとともにみ言葉を受け、それによってキリスト者同士の交わりがなされ、日々の仕事もなされていくことが求められている。私たちの生活のすべての中に、主イエスが来てくださることによって、私たちはこの世のさまざまの悲しみや暗いできごとにもかかわらず、魂の奥なる一点で光を感じ、奪い去られることのない喜びを与えられると約束されている。

野草と樹木たち

エビネ

徳島県小松島市 日峰山（植栽）

2009.4.28



エビネは、前回に出したシュンランとともに、春に咲く蘭の仲間です。これは、花の美しさのゆえに、多くの人に愛好されてきた花です。シュンランが地味な色合いなのに対して、このエビネはさまざまな色のものがあり、形も美しいものが多いのです。

この写真のエビネは、キリスト者の友人からずっと以前に分けてもらったものをわが家の山の自然の土地に植えたもので、毎年咲き続けています。

野生のエビネには、大分以前に私は二度しか出会ったことがありません。それだけにこうした自然のたたくまのなかで春になると大地からこのような美しい花を咲かせ、神の国の美しさの一端を語りかけてくれるのはとてもありがたいことです。

エビネは、森林の下に咲く花で、1日に1～2時間程度日光があたり、あとは木漏れ日程度の状態でこのようによい花を咲かせます。植物もさまざまで、日当たりがよくなければ花も咲かないものもあれば、このようにわずかの日の光でも立派な花を咲かせるものもあります。

人間の世界にあっても、このエビネのように、わずかの光しか当たっていない木陰のようなところにあってもなお、立派な心の花を咲かせることのできる人もいます。それは、神のいのちの言葉を受けて生きている人だと言えます。

聖書にあるように、み言葉に従う道を歩むときには、その人は水のほとりに植えた木のように、葉が茂り、豊かな実を結ぶ（詩篇第一篇）と記されているとおりです。私たちも人生の暗い谷間にあっても、主の光を受けて魂が照らされ、実を結ぶようにと導かれたいと思います。（写真、文ともにT.YOSHIMURA）